

聞こえにくい
聞こえない

お子さんを育てる保護者の皆様へ

家族に聞こえにくい、聞こえないお子さんがいらっしゃる皆様は、日々の生活や育児の中で、悩んだり戸惑うことがあるかもしれません。

このリーフレットでは、「先輩保護者の体験談」と「困ったときの相談先」を紹介していますので、今後の子育てを行う上での参考にいただければと思います。

子育て体験談① 「手話による子育て」

私には子どもが2人おります。2人とも耳がきこえません。上の子は高校生、下の子は小学生です。きこえない子どもの子育てはどのようなものか、私の経験をお伝えしたいと思います。

●子どもがきこえないとわかったとき

上の子は、きこえについて心配があり、市役所の1歳半健診時に小児科医に相談したところ、精密検査を受けるように勧められ、大学病院で検査を受けたところ、「重度難聴」と判明しました。告知を受けたときはショックが大きく、その後の医師の説明等はあまり覚えていませんし、自分の子どもがきこえないということが受け入れられずに数日間泣きながら過ごしたと記憶しています。どうして1歳半まで気がつかなかったかという点、上の子は夜泣きがひどくとても手のかかる子で毎日無我夢中で子育てをしていたことと、まさか自分の子どもの耳がきこえないということは全く考えられなかったからです。今思うと、泣く、笑う以外はあまり声を出さず、抱いているときによくのけぞって周りを見ていたように思います。音に反応しているのではなく、音とともに起こる振動に反応していたようです。



下の子は、生後すぐに出産した病院で検査をしたところ、上の子と同じ「重度難聴」と判明しました。告知は二度目ということもありショックは少なかったです。早期にわかったことで落ち着いて下の子と関わることができました。

告知の際に、私たちは医師から「子どもがきこえないことが残念なことだ」と言われました。これはきこえる人の側からの考えであり、障害に対するマイナスイメージを植えつけているように感じました。その後、ろうの方から言われたのは、「生まれたときから音を聞いたことがないから、きこえなくて残念と感じたことはない」ということです。私も二人の子どもがきこえなくても残念と感ずることはありません。

●手話で育てたい

上の子は告知後すぐに人工内耳の装用を強く勧められました。「この方法以外ない」という説明と、「手術をする」ということが受け入れられず、本当に人工内耳を装用することが子どもにとって良いことなのか、夫婦で考え情報を集めました。成功例も失敗例もたくさんありましたが、その中で手話で子育てしている例があり、無理に音を聞かせてきこえる人に近づけるのではなく、きこえないありのままを受け入れ、ろう者として育てることが私たちの子どもにとって良いことなのではないかと思い手話で育てることを選択しました。きこえる親が手話で子育てをすることは簡単なことではありませんが、私たちの場合は幸いたくさんのろうの方々にお

会いする機会がありました。出会いのきっかけは聾学校の研修会でした。私達が「手話で子育てしたい」という気持ちを伝えると、「ろうのことは当事者に聞かないとわからない」と、ろうについてたくさんの情報をもたらしました。

私が手話を身につけることができたのは、ろうの友人とたくさん交流するとともに、旭川市の手話講座や、札幌市での研修会に積極的に参加したからです。小さい子どもを連れて研修会などに参加するのは大変でしたが、とにかく子どもと早くスムーズにコミュニケーションをとりたくて必死だったので、辛いと感じたことはありませんでした。最近は聾学校でも手話を学べる研修会が行われているので、早くに手話を学ぶことができます。



きこえる親が手話で子育てをすることが絶対に無理ということは決してありませんし、誰にでもできることだと思いますが、手話を自然に身につける事は難しいので努力が必要です。

●子育てをするときに気を付けたこと

きこえない子どもを育てる場合には、「特徴」を知っておくと関わりやすくなります。私も上の子の子育てを始めたころは特徴がわからなかったので、親子ともにストレスを抱えることになりました。下の子を育てる頃には特徴を知っていたので早くから良い関係を築くことができました。乳幼児期に気を付けたことは、

- ・目と目をしっかりと合わせてコミュニケーションをとる。
- ・周りの音がわからないので目で確認させる。
- ・後ろから声をかけない。呼ぶときは肩などを優しくトントンとする。
- ・表情豊かに話しかける（マスクで口を隠さない）。

このように、私たち「きこえる人」とのコミュニケーション方法とは異なることがあるということを正しく理解して子育てをすると、きこえない子の子育てが楽しくなります。私も正しい知識を身につけてからは子育てがとても楽しくなりました。

●手話で育ててよかったこと

手話で子育てしてよかったことは次のとおりです。

- ・親子間のコミュニケーションがとても丁寧にスムーズにできるようになった。
- ・手話にも喃語があることを知った（手話は日本語とは異なる言語で、小さい頃から使い始めると日本語の成長と同じように乳幼児期に喃語が出る）。
※喃語（なんご）とは：乳幼児が発する「アー」「ウー」などの声
- ・手話を使うことにより、子どもの頭の中で映像としてのイメージをたくさん作ることができるので、言葉の意味をつかみやすくなる。
- ・わからないことをわからないと聞けるようになる（わかったふりをしなくなる）。
- ・自分はきこえなくても大丈夫と自信を持つことができる。

●子どもと社会とのかかわり

子どもときこえる人とのコミュニケーションは、上の子は高校生ですので、筆談やスマートフォンで言いたいことを伝えていきます。筆談だと聞き間違いがないのでスムーズにコミュニケーションがとれているようで

す。下の子は地域の小学校と年に数回交流をしていますので、手話を使う様子を見た同学年の子が、自然と簡単な手話や身振りを使ってくれるようになり、楽しく交流できています。まずは自分がきこえないことを認識し相手に伝えていくことが大切だと思います。

私の子育てはまだ途中です。子どもたちが社会に出た後はどうなるかはわかりませんが、ろう者として誇りを持ってきこえる人たちと共生していくことを願っています。

子育て体験談② 「人工内耳の装用」

私には子どもが4人いて、長女が先天性難聴です。「人工内耳」という補装器具を付けていないときは全く音声がきこえません。娘がきこえないとわかり、病院や聾学校の先生方に相談しながら「人工内耳」を装用する手術を行いました。その後も娘の意思を第一に考え、きこえるお子さんとのコミュニケーションを見守ってきました。その12年間の経験をお伝えします。

●子どもがきこえないとわかったとき

旭川市内の産婦人科で生後すぐに新生児の聴覚スクリーニング検査を受けましたが、何度受けても無反応でした。生後3か月位で耳鼻科へ受診し、生後4か月で両耳とも補聴器を着けました。その後は、保育園へ通いながら、定期的に乳幼児相談の旭川聾学校へ通い、先生方からアドバイスをもらいました。

私の場合、第一子でしたので、産んだ直後に耳がきこえないということを受け入れることができず絶望的でした。心のどこかで「いや、そんなことあるはずが無い」と願っていた記憶が今でもあります。

●人工内耳の装用

娘が2歳の終わりに片耳に人工内耳を装用する手術を受けました。当時は、人工内耳の装用を旭川で行う例は少なかったと思います。私はただ、娘が大きくなったときに「手術をしたかった」という言葉をききたくないと思う一心で、全身麻酔の恐怖や、2歳下のまだ赤ちゃんの次女と離ればなれになる不安もありましたが、実家の協力も得て手術を決断しました。ただ、手術中の待ち時間が本当に長く感じたことを今でも忘れません。手術の終わりがゴールではないということも分かっていたのですが、なんとなくホッとしました。

娘は、補聴器や人工内耳を着けることを嫌がり投げたりすることもしばしばありましたが、なるべく着けてもらうように工夫をしたことを思い出します。

そして10歳の時、娘の意思でもう一方の耳の人工内耳の手術を受けました。私は娘が「したい!!」ということはあるべくサポートし協力したいと思ってます。常に娘にとって一番よい環境を作っていくのがいいと考えています。



●これまでの子育て

娘は旭川聾学校の幼稚部に年少から年長まで通っていました。この時期は口話とジェスチャー、写真や絵カードなどを使いながらやり取りをしていました。発語が増える時期はそれぞれですが、娘は特に年長さんくらいの時に発語がとでも増えた気がします。

小学部へ入学したころには、手話もどんどん使うようになりました。また、聞こえるお子さんと関わること

も多くなり、娘は手話と口話の使い分けをするようになりました。

低学年の時、同じ年頃の子に、着けている人工内耳を何かと聞かれ、「耳が聞こえないからこれを着けて聾学校へ通っているの」と言ったそうです。小さいながらに自分のことを自分なりに理解し、アウトプットできるんだと驚いたことがありました。

現在では年に2～3回地域の小学校に交流に行っています。また、娘は習いごともしていますが、どれも本人の意思で通っています。娘なりに手話と口話を上手く使い分けしているようです。

娘は、家の中では兄弟と口話を使ってお話ししたり遊んだりしています。下の2人はまだ小さく、お互いに聞き返しながらコミュニケーションを取っています。兄弟は手話にも興味を持ちはじめ、娘から聞いて教わっています。来年は兄弟も手話検定を受けたいと言うようになりました。母である私も手話講習会に参加し手話を習っていますが、娘とのメインのコミュニケーションは口話です。娘とは何でも話します。学校であったことなどを自分から教えてくれたりするので、反抗期はこれからのような気がします。

娘はこれからの進学、就職について、まだあまりピンと来ていないようですが、今後やりたいことや、行きたいところへのサポートは、本人のやる気と本気次第ですが最大限にサポートしていきたいと思います。

※口話（こうわ）とは：補聴器などを用いて音を聞き取ったり、相手の話し言葉を口の動きなどから読み取ったりして言葉を理解すること。また、自らも音声を用いて会話すること。



??? 子育てで困ったときには ???

聞こえにくい、聞こえないお子さんを育てる保護者の皆様は、「我が子をどう育てていけばよいのだろうか?」「どこに相談すればよいのか?」といった不安を抱えているのではないのでしょうか。

旭川聾学校乳幼児相談室では、皆様が子育てを行う上での悩みや不安、疑問を受け止め、0歳から2歳までの聞こえや言葉の発達に心配のあるお子さんの相談や支援を、医療機関や保健所、幼稚園、保育園等関係機関と連携しながら行っています。

また、旭川聾学校には、幼稚部・小学部・中学部が設置されており、子どもが生き生きと学校生活を送り、学習している様子を見学することができます。

お問合せは・・・旭川聾学校 乳幼児相談室 (電話：0166-51-6121)

(FAX：0166-51-6122)

発行：旭川市福祉保険部障害福祉課障害事業係

電話：0166-25-6476

FAX：0166-24-7007